

て候。紀伊對山男數寄にて、自分にもひた物額のすみなど直し申事を御好み候。なにと御直し候ても、左右のかど取合不申候に付、毎日鏡にて自身にも見被申候て、隨分無相違様直し被申候得共、ひづみは直り不申候故、家來に御見せ候へば、毛頭も相違無之由各申候。去共御意の通りに少しひづみ候様に見申候。合點不參儀に候。こゝに某と申もの、人のひたひを取申事名人に候間、御よびよせ御見せ被成候へと申所に、早々めしに遣候へとて御見せ候へば、御額左右とも一筋も相違無之候由申され候。されども御意の通りひづみ候て見え申候。私に被仰付候はゞ、其まゝ直し可申と申に付、さらば直し候へと御申候時、鑷子を持ってたち候て、左の眉毛を二三本ぬき申候。もはや直り申候由申故、鏡にて見申候へば、成程ろくになり申候て、よろこびにて候。是等名人と可申候。外の者はひたひばかり氣をつけ申候。眉へは氣付不申候。詩なども外事にて其事の精神を、くわつと添申事有之候由に被申候。私申候は成程左様に可有之儀に御座候。扱今の者はひたひを取申事は、名人の所爲と可申候。對山は不名人と可申候。天下の諸侯な

ど、さやうに男ぶりに心を盡し申候事、不相應の儀に候へば、不名人と我等は存候旨申候へば笑被申候。已上。
一、柳宗元、婁秀才に酬ゆるの詩
酬婁秀才寓居開元寺。早秋秋月夜。病中見寄

柳 宗 元

客有故園思。瀟湘生夜愁。病依居士室。夢繞羽人丘。味道憐知止。遺名得自求。壁空殘月曙。門掩候蟲秋。謬委雙金重。難徵雜佩酬。碧霄無狂路。徒此助離憂。

一、三宅丹次郎・雨森三哲の儀室鳩巢來狀

享保十四年

芦孝七郎不絶參候て語申候。是も屋敷門出入難成、是にこまり申由に御座候。頃日孝七郎取次にて、多田儀八と申者、私指南受度とて參申候。是は三宅丹次郎と申、只今も京都に居申候儒士の弟子にて候。丹次郎は山崎加右衛門門弟にて、阿部豊後守殿へ仕へ居り候所に直諫いたし、久々閉門被申付候上にて彼家を辭し、只今京へ引籠居申候。上方にて名望も有之者にて候。いかさま志有之者と聞え申候。老夫事を承及、何とぞ一面仕度と申由承候。頃日病中書を見申事も痛にて難成、日夜爐邊にねつ起ついたし罷有候故、

心に記し申儀を工夫仕候て、日を送り候所、論語學而篇は大方集注共に記し罷在候故、ひたと存じ出候て會得仕候義理を、覺書の様にふるひく書留申候。去年より連日左様にいたし候へば、學而篇過半濟申候。文辭を改候て次第可仕と存じ候。頓て其許へ遣候て見せ可申候。其に付前年雨森三哲と申候て、當分林家門人に託し居申候松平讃岐守殿の儒臣、當世にてめづらしき程に存じ候者に御座候。拙子を信じ候て折節參候者に候所、其後病死仕候。于今をしき儀と存じ候。此者敬の主一の事を申候て、心には正面有之候。正面を守り候て散亂不仕候へば、一の意味を認得可申候由物語申候。其時分こゝかと承候所、頃日存候へばなる程尤にて候。正面さへくづれ不申候へば、自然に主一に罷成申候。動靜を不論、常に心の正面現在して罷在候様に仕筈に候。動もすれば正面亂れ候て、わきへ參り左を見右を見うしろへ向候故、二三に罷成申候と存じ候。只今存じ候へば、三哲體認の上にて得申儀と存じ候。是程の儒只今當地にも無之候。いかゞして林家の門に遊び候や、是は不審に存じ候。京にて學問いたし候由に候。林家へはたゞ門人

と申名ばかり託し申候か。ふと存寄候て申進候。以上。

己酉 三月十三日

于時先生七十二歳
室 新 助

大地新八郎殿

一、伊藤齋宮講學の事

今月十七日伊藤齋宮私宅へ罷越申間候は、私儀淺加故九丞舊宅を買請、觀文書堂と號を付、前の通講釋抔仕罷在候。去夏前田勘解由すゝめにて、人持組高祿の面々數輩誘引有之、講席をも格別に改め急度講談仕可然候。勘解由も毎講日罷出可申旨にて、連衆相極申候。然所去年六月晦日頃、勘解由家老役被申付候。依之連衆へ斷有之候は、當役にては毎日の出勤暇も無之、其上同役存寄も難計候間、自分に罷出候儀は遠慮に存じ候。拙子には無御構、何も出席有之様に仕度由に候所、連衆各勘解由出席無之候者、先づ相扣可申旨にて講會も相止申候。

右勘解由と申候は、前田駿河守隱居の後、源隨と申時出生の末子にて、先代の内より被召出、三千石祿し、當代江戸留守居役相勤候所、去年六月家老役被申付候。如此御座候處、當春勘解由より最前の者共へ廻狀を以て、